

1. イエスはこのことを聞かれると、舟でそこを去り、自分だけで寂しい所に行かれた。すると、群衆がそれと聞いて、町々から、歩いてイエスのあとを追った。イエスは舟から上がられると、多くの群衆を見られ、彼らを深くあわれんで、彼らの病気を直された。(14:13-14)
 - a. 今日の箇所はイエスが病人をいやし五千人に食物を与える話であるが、「イエスはこのことを聞かれると」という記述で始まっている。
 - b. イエスが聞かれた「このこと」とは、愛する友であり従兄弟であったバプテスマのヨハネが首をはねられたことである。ヨハネは当時の世でイエスのことを本当に理解していた唯一の人物であったかもしれない。その彼が残忍な方法で死刑になったことを知らされたのである。
 - c. そのようなことがあったので、イエスは嘆き悲しむためにそこを去りご自分だけで寂しい所に行かれたのも十分理解できる。
 - d. しかしどんなにひどいことが起ころうと世界は動き続ける。イエスのためにも時は止まらなかった。
 - e. イエスはこの機会を伝道よりも嘆き悲しむために用いてもよかったはずである。もし私たちが似たような状況にあったとしても、一歩引いて悲しむ時を持つようにお勧めしたい。おそらくイエスもそのようにおっしゃるのではないだろうか。
 - f. もちろん、ミニストリーを行なうために神は祝福をくださる。ここでも神の恵みがイエスの心を深いあわれみで満たしている。そしてイエスは愛にあふれミニストリーを行なうのである。
 - g. 私たちがキリストとの歩みの中で彼の声を聞き分け従う時に、それが正しい道を歩んでいるかどうかの判断基準になる。様々な出来事の中で超自然的な神によるあわれみを感じることはすばらしいことである。

2. 夕方になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは寂しい所ですし、時刻ももう回っています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行つてめいめいで食物を買うようにさせてください。」しかし、イエスは言われた。「彼らが出かけて行く必要はありません。あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」しかし、弟子たちはイエスに言った。「ここには、パンが五つと魚が二匹よりほかありません。」すると、イエスは言われた。「それを、ここに持って来なさい。」(14:15-18)
 - a. キリストに従う時には内面にあわれみが生まれ、外面では奉仕をし、忠実に従う、という3つの要素がある。(そして敵はこの3つのエリアのうちのどこかに攻撃をして私たちを迷わせようとする。)
 - b. イエスはここで一日の活動を終わりにしても良かったはずだが、神のご計画により新たな問題に直面する。イエスと一緒にいた弟子たちは、「今日はここまでにして、店が閉まる前に全員が食べられるように解散させましょう」と申し出る。
 - c. しかし、ニーズがあり、神の恵みがあるところには新たな動きが起こる。

3. そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあった。食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであった。(14:19-21)
 - a. 今度は群衆に選択が迫られる。時刻も回っているし、食物を買いに行くなら一刻でも早い方が良い。ところがイエスは群衆にすわるようにお命じになる。群衆には「急いでいるのに…」というジレンマがあったことであろう。
 - b. イエスに従い残った者たちは、いやされただけでなく、満腹になった。もしもその場を去っていたら満たされなかったかもしれない。早くあきらめてはいけない。
 - c. 弟子たちは、彼ら自身の手を通して奇蹟が行われたのを目のあたりにした。弟子たちももちろん食べて満足したであろう。神はあなたを満たさないままでは見捨てられない良いお方である。そして足りないように見えても十分に与えてくださるお方である。